

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

環太平洋大学 自己点検評価委員会規程

(責任者名) 井上 聡

(役職名) 委員長・大学評価・IR室長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	自己点検評価委員会等の意見を踏まえ、新入生ガイダンス、オリエンテーション、1・2年の「基礎ゼミナール」・3・4年の「専門ゼミナール」等により、体育学部・経済経営学部で、ICTの基礎や現代社会経済との関連を教育し、学生アンケート等で教育に反映している。全学のICT関連では、本プログラムの必修科目と関連選択科目以外に、まだ共通の履修体制が十分ではなく、今後、全学的な体制確立が必要である。なお、経済経営学部ではMOS資格を取得推奨しており、学科教育の評価も高いが、まだ履修体制に偏りがあり、全学的な実質科目単位への移行を目指す。
学修成果	本学では、全学生にPC端末の必携化を実施しているため、各学生にICT教育やゼミナール等の授業ができ、学内ポータルサイト(ユニバーサルパスポート)によるWeb登録申請やWebアンケート実施が可能であるが、大学全体では、試行的にGoogle系アプリを利用した授業と素早い学生アンケート等で、学生の授業の理解度把握を実施し学修成果を挙げている。さらに現在、上記の結果を踏まえ、DX関連教育の全学的学修調査の充実のため上記Google系のLMSアプリ運用と全学LMSシステムの有機的利用を目指している。これらの活動は今後、全学生のより高い学修成果に反映できる。
学生アンケート等を通じた学生の理解度	体育学部・経済経営学部の全科目に対し学生による授業評価アンケートを前期・後期の中間で実施し、授業への満足度(含理解度)等を調査している。その他に学生に対しては、予定者の入学前教育、入学後のガイダンス、オリエンテーション、1・2年の「基礎ゼミナール」・3・4年の「専門ゼミナール」で、ICTの入門基礎教育や現代社会との関連を教育しアンケートを取得している。学生アンケートに関しては、回転の速いGoogleアプリによる経営総合学科内LMSの中でも有効に試行しており、学生の理解度に関し高い評価が得られているが、本教育プログラムに関しては、これを敷衍して全学LMSシステムとの有機的結合を図り、学生理解度の向上、PBL、反転授業等、今後の授業展開を進める。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	COVID-19(新型コロナウイルス)の影響でハイブリッド型授業であったが、学生による授業評価や学修時間等に関するアンケートも実施して学生の履修状況や理解度も把握でき、各学生へのアドバイスやサポート、他学生や後輩への推奨も可能となった。今はまだ後輩推奨度の定量的評価には至らないが、今後、本プログラムの改善も含めた推奨度の全学データを集めることが可能である。本学は体育学部・経済経営学部・次世代教育学部の3学部を有し、教育内容や学生志向が広範囲に渡るため、本申請プログラムを新入学生へ推奨できるよう、入学時からのデータ社会との各学生の関わりを明示し学修意欲を向上させ、目標の可視化や各自の将来との関連性を構築する。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本教育プログラムを構成する「コンピュータリテラシーⅠ」「コンピュータリテラシーⅡ」が教養科目の必修科目であり、基本的に全員が履修する。また体育学部・経済経営学部では数理・データサイエンス・AI教育に関し、現在まで科目新設等の整備・充実が進んでいるが、次世代教育学部(保育者・教育者養成学部)のカリキュラムにまだ必要十分な授業設定の検討を要している。なお、本プログラムの計画に従い、今後もカリキュラム・シラバスの改善を続け、ICT・DX関連の正規演習科目への新設・改編など、本プログラムの一層の充実を図る。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>本学では卒業生の進路先や活躍状況の把握を従来より実施し、また、企業などの評価も教育に反映させているが、本教育プログラムに関してはまだ体系的な学外評価はできていない。しかし、企業等学外からの要請も高く、教育充実をはかり本プログラム申請に至っている。今後は民間企業、公務員団体に対して企業調査を実施し、本プログラム修了卒業生の採用状況や企業評価を把握する仕組みを設けて、全学的な協力体制のもとで産学連携、企業等の評価、プログラム修了者の進路や活躍状況を体系的に評価・集計し、全学的な教育体制充実を実現して行く。</p>
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>産業界からの視点については、これまで外部団体との連携協定など通して外部視点を反映させてきた。現行の体育学部・経済経営学部から本教育プログラム関連学科目の充実を進め全学教育への浸透を図っている。これまでの外部意見から、学生に対しては数理やデータサイエンス開発を直接前面に出すことよりも、学生各自の将来の専門分野にICT・データやDXがどう関わっているかを可視化する教育手法が重要と判断している。今後は理数・データ科学の本質に迫り得る教育カリキュラムの構築、興味を引く入門の概念と、最新の社会情勢と関連進路への可視化などを重視する。</p>
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	<p>現代社会では数理・データ科学・AIが人々の前面に出ることは少ないが、GAFAIに代表される現代企業では活動の基本全てに大きな影響を及ぼしている。一方で全ての若い世代にスマホやWeb・Youtubeが浸透している。本教育プログラムはこれらの現象のギャップを教育的に埋めるものとして極めて重要であり、本学でも、学生の向かう将来の社会とICT/DXとが密接に結びつくことが分かりやすく可視化できることを重点にプログラムを構築する。例えば簿記とExcelやVBA・スクリプト言語などの関連、体育系企業やスポーツ団体、起業、アントレプレナーなどとICT・AIとの関連など、各学生の将来と社会の実例を繋ぎ、学ぶ楽しさと意義を実感できるような座学・演習の構築を図る。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>元々開学からは体育系・教育系大学であった本学では、従来は数理・データサイエンス・AI教育の十分な展開は難しかった。しかし、今後の国内外の産業やビジネスの進展を考慮すると、DXの社会浸透に対し、ICTを活用できる若く有意な人材育成の必要性は極めて大きい。よって、体育学部・経済経営学部・次世代教育学部の幅広い分野に教育的横串を通せるよう、3学部と協働して、ICT系企業や外部意見も参考に、必要な教育水準と内容を維持し向上をはかる。</p>